



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Philosophical Intuitions in the Free Will Debate : Unraveling Boundaries and Insights [an abstract of entire text]
Author(s)	稲荷森, 輝一
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16480号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95090
Type	doctoral thesis
File Information	Kiichi_Inarimori_summary.pdf



学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 稲荷森輝一

学位論文題名

Philosophical Intuitions in the Free Will Debate: Unraveling Boundaries and Insights

（自由意志論争における哲学的直観：境界の探究と新たな視座）

・本論文の観点

本論文の目的は、決定論と道徳的責任に必要な自由意志の両立可能性をめぐる現代自由意志論争において、誰の直観が、どのように用いられるべきかを明らかにすることにある。現代自由意志論では、両立論者と非両立論者のいずれの立場においても、各々の理論が自由意志/道徳的責任に関する人々の直観と適合的であることを前提、ないし主張してきた。このように哲学者同士の根源的直観が対立する中、2000年以降の自由意志の実験哲学の発展をうけ、一般の人々の直観が経験的に調査されるようになった。今のところ、決定論と自由意志/道徳的責任をめぐる人々の反応は文脈によって異なることが知られており、こうした結果の解釈については論争が続いている。一方、一部の実験哲学者は、人々の直観が哲学的真理と無関係の要因に影響されるということを根拠に、哲学的直観の信頼性それ自体に疑問を投げかけている。これに対して一部の哲学者は、一般人の直観の非信頼性は哲学者には当てはまらないと主張しているが、こうした論証の成否は定かでない。また、Chat GPTをはじめとするLLM（大規模言語モデル）の登場にともない、人工知能も哲学的問題に回答することができるようになった。以上の背景を踏まえ、本論文では一般人の直観、哲学者の直観、AIの直観の三つに焦点を当て、自由意志の哲学にとっていずれの直観が最も重要であるかを明らかにする。結論としては、自由意志論争の性質および各々の直観に関する洞察を総合的に勘案し、一般人の直観が最重要視されるべきであることを主張する。同時に、自由意志の実験哲学は、一般人が自由意志/道徳的責任の帰属に関する直観を産出する心理的メカニズムの解明を目指すべきであることを示す。関連して、現時点で有望だと考えられるメカニズムの候補として「非認知主義」的見解を提案する。加えて、そうした探究にとって哲学者の直観・AI直観がなしうる貢献について論じる。

・本論文の内容

本論文は6章からなる。第1章では、自由意志論において直観が中心的役割を果たしてきたことを明らかにする。より正確には、両立論者も非両立論者も、彼らの理論の前提が人々の直観と適合的であることを明確に（あるいは暗黙の裡に）前提してきたことを示す。同時に、フランクファート型事例にみられる通り、しばしば人々が両立論的直観を有しているか非両立論的直観を有しているかそれ自体が大きな係争点となってきたことを論じる。

第2章では、これまでに行われてきた自由意志の実験哲学を総括する。自由意志の実験哲学で多くの場合、決定論的な世界を描写した架空のシナリオについて、人々が自由意志と道徳的責任を帰属するか否かを調査してきた。本分野では、決定論が描写される仕方や、提示される行為に応じて人々の回答が変化すること、つまり、事例の設定次第で両立論的な回答も非両立論的な回答も示されることが明らかとなっている（c.f. Nichols and Knobe 2007）。本章ではこうした現象について、いずれかの回答をエラーとして棄却する複数の仮説をレビューする。そのうえで、人々の直観について考えられうる3つの仮説を提示し、今後行われるべき研究の方向性を議論する。最終的に第2章では、人々の回答に影響を与える決定論の理解エラーに関するより包括的研究が必要であること、そのうえで、決定論的状况における自由意志/道徳的責任帰属直観に関する他因子の影響を再評価すべきであることが示される。

第3章では、第2章における提案を踏まえて実施した新たな実験について報告する。第二章で論じるエラー仮説のうち、両立論的回答の多くは因果的決定論において別-可能性が排除されることを十分理解していないことに起因するという「Intrusion説」（Nadelhoffer et al. 2020）/非両立論的回答の多くは因果的決定論が心的因果を排除するものと誤って理解したことに起因するとい

う「Bypass 説」(Nahmias and Murray 2010; Murray and Nahmias 2014)に着目し、これら二つの理解エラーが人々の回答に及ぼす影響を包括的に明らかにする。また、自由意志の実験哲学において実験参加者の大半が決定論を誤解していることを示唆する Nadelhoffer et al. (2023)の研究結果を踏まえ、新しいシナリオを用いた理解度の向上、および大規模調査によって決定論を正しく理解した人々の直観を解明することを試みる。同時に、両立可能性問題に関する人々の回答の多様性を説明するもう一つの有望な仮説である「Motivated Cognition 説」に注目し、人々の処罰欲求が自由意志/道徳的責任に与える影響、および理解エラーと比較した際の効果量の大きさについて評価する。最終的に本実験では、決定論を正しく理解した人々の多くは、少なくとも具体的な非道徳的行為については両立論的直観を示すこと、理解エラーのうち Intrusion の影響は限定的であること、責任帰属直観と処罰欲求の間に密接な関係のあることが示される。

第4章では、一部の実験哲学者が指摘する哲学的直観の非-信頼性問題と、それに対する応答としての Expertise Defense に焦点を当て、哲学者の直観の信頼性について論じる。実験哲学の登場以降、思考実験に関する人々の直観は、本来哲学的真理とは無関係のはずの様々な要因に影響されることが示されている。このことを論拠として、一部の実験哲学者は、哲学的直観は哲学理論にとって信頼できる証拠を提供しないと主張する。一方、こうした批判に対して一部の哲学者は、実験哲学が対象とするような一般の人々の直観が信頼できないことは、プロの哲学者の直観までもが信頼できないことを必ずしも意味しないと反論している。本章では、こうしたいわゆる Expertise Defense が成功するために充足されるべき要件を明らかにしたうえで、少なくとも自由意志の哲学においては、これらの要件が充足されることを示す。

第5章では、Chat-GPT 等の LLM が哲学的問題について示す回答、AI 直観の活用可能性について議論する。既存の LLM は、すでに哲学的思考実験に人間と同じような回答を示すことができる。本章では、こうした AI 直観がもつ認識論的身分について四つの可能性を提示したうえで、もし LLM が種々の認知バイアスや事例の理解エラー等、人間の直観の信頼性を棄損する様々な要因から自由であるなら、そうした AI の産出する直観は人間の直観以上に高い認識的価値をもちうることを明らかにする。加えて、現行の AI が哲学的問題に与える回答の認識的身分を明らかにする目的で、自由意志の実験哲学において用いられるのと同様の課題を複数の LLM に与え、これらのモデルが無関連要因からどれだけ自由であるか、また決定論概念をどこまで正確に理解していると考えられるかを検証する。

第6章では、ここまでの議論を踏まえ、第1章で設定した問題に対する回答を提示する。まず、誰の直観が用いられるべきか、という問いに関して、本論争が哲学者同士の直観の対立に起因している以上、たとえ哲学者の直観が高い信頼性を有するにせよ、両立論と非両立論の対立を哲学者の直観によって解決することはできないと論じる。こうした前提のもと、一般人の直観は決定論の理解エラーに影響されているものの、こうしたエラーの影響を正しく考慮すれば、なおも両立可能性問題に関する人々の直観を予測することは可能であり、ゆえに自由意志論争においては、一般の人々の直観が参照されるべきであると主張する。そのうえで、そうした一般の人々の直観を用いる上では、事例の設定次第で彼らの示す直観の異なることが明らかである以上、単に人々の直観を明らかにするにとどまらず、それらの産出される心理学的なメカニズムを解明することによって、各々の直観の有する哲学的な重要性を評価することが不可欠であると結論付ける。加えて、そうした探究のプロセスにおいて哲学者の直観、AI の直観がなしうる貢献について論じる。